

## 上郡町の偉人

## 大鳥圭介

「鵬程万里」第二十四回

著者 中川由香

「如楓家訓」は、圭介が家族の為に記した人生の心構えです。明治二十九年に圭介が作成したものが、後に雑誌「太陽」などに掲載されました。明治四十一年に改めて家族や友人に配布する為にまとめ直され、活字で印刷されました。圭介の山あり谷ありの道程で身に刻んだ教訓に満ちた、現実的な人生指南書といえます。内容は、家計、働き方や休日、教育、学校、恩師について、友人の見分け方や付き合い方、日記、約束や借金、恩義、禍福と盛衰、栄達と大器晩成についてなど、日常の細々とした気配りから人生の大目標にまでその筆が及んでいます。

例えば、子供は愛情と共に育てるべきだが、過ぎれば子供は増長し勝手我儘になる、雑事は自分で始末させるべきとするなど、子供を一人人として尊重する近代的な視点の元に圭介は語ります。

一方、婦女子は世間の華美な流行に心を奪われがちだが、日々家の事業を助け文書を整理する役割を持ち、その勤怠は一家盛衰の大本であり、女性は子供だけではなく世の根本となるべき存在であると重要視します。そして、友人を招き質素な宴会を開くのも良いことで、詩歌は特に女性にとっても上品な趣味とし、古今の歌を調べることで歴史地理名所を自然に知ることが出来るのも良いとしています。この女性の理想像に、社交的で詩文をよくした妻みちの事を

圭介は重ねているようにも思われます。また、休日野に出て山に遊び、花を愛でて子供に山川の実景を示しながら、平日の憂さを晴らして命の洗濯をするのがよいとも述べています。生涯に渡り働き詰めだった圭介ですが、常に厳格さを要求するのではなく、働くべき時は必ず働き、休むべき時は必ず休み、自分への褒美も必要であると述べます。ただ働く事だけ奨励するのではない、人格の深さを養うのに必要なバランス感覚を圭介は示しています。

圭介は友人を益友と損友の二種に分けます。温厚篤実で智勇があり事業に専心している者を益友と述べ、志が浮薄であちこちに目移りする者を損友としています。益友は、言葉は少なく行いが剛なので親しみ難い、一方で損友は言行に気安いのので馴れやすいが、朱に交じれば赤くなり生涯を誤る者が多いと、友人の見分け方を説きます。また、知人を訪問する際、仕事の都合の場合は用が終われば早々に辞すべきで、近況や安否を尋ねる場合は職務の事は言わず四方山の物語を語り、他人の毀誉に関わることは言うべきではないと、人づきあいの秘訣を述べます。

家訓には圭介の価値観も多く込められています。例えば、井戸はともかく水道水は努めて必要以外は使わないよう心掛けるべき、これは公共の水を節約することは公益の為であるからと

説きます。水道の水には多くの投入が必要である為で、圭介はただの節約家ではなく、常に世の損益の視点で説いています。

出世については、特に若いころは急進速成を望み、意のままにならなければすぐに気を挫くものだが、それで不平を言うのは見苦しい、ただ自分の勉強が不十分で誠意が伴っていないとみなし大器晩成を目指すべきと訓戒します。そして、志は大きくとも世の風潮に順と逆があり、時勢の幸不幸があると言います。これも、例えば工業専門雑誌を日本で最初に刊行するも、世間が求めるより二十年早かった為に収益が覚束なく難航した圭介の苦難などを伺わせます。人生には屈する時と伸びる時がある、しかるべき先導者を頼ることも時には必要、様々な艱難に遭遇して世の辛酸を舐め、世間の変遷に惑い心胆を鍛えるのも人生経歴の学校である、智勇も知識もその度に成熟していく、書を読むばかりが学問ではない、と圭介は述べます。まさに、様々な先導者との出会いの中、世の変遷の中で失敗も踏みしめて波乱万丈を生き抜いてきた圭介らしい言葉です。

そして、刻苦奮励して身を立て大家と呼ばれるのは願わしい事だが、それよりも忠孝の大義を重んじ、信義の節操を守り、国に尽して世の模範となる事が、この上ない一家の面目であると述べます。自分や家より、まず国や世界の為を考える、その事が巡って家の名誉となるといふ圭介の信念が、家訓には込められています。「如楓家訓」は、明治後期の当時だけではなく、現代に至っても我々が生きる上で心に留めておきたい示唆に富んでいます。